

column

アート・アクティヴィズム94 ——イトー・タリーの新作パフォーマンス ——「自分で額を撫でるとき」

北原恵

(1) 《37兆個が眠りに就くまえに
V o l . 2 「自分で額を撫でると
き」

四月一六日、イトー・タリー
さんのパフォーマンスを見に東
京へ行った。コロナ以来、初め
ての東京。どうしても見たかつ
た。

今回のパフォーマンスは、展
覧会「Loop beyond Art」広が
る、人と命の輪」の一環として、
恵比寿の工房・親で非公開で開
催された。「命の最前線」で対峙
している病院や看護介護などの
施設にアートを展示する」同展
には、タリーのほか五名の作家
(田寄裕季子・橋本佐枝子、松
下誠子、宮森敬子、佐藤慶子)
が出品している。

タリーのパフォーマンスのタ
イトルは、《37兆個が眠りに就
くまえにV o l . 2 「自分で額
を撫でるとき」》である。37兆
個とは、人間のからだの細胞全
ての数だそうだ。十年前、徐々
にからだが動かなくなるALS
を発病したタリーは車椅子で生
活しながらも、二〇一九年夏、
四年ぶりにパフォーマンスを再
開し、東京都現代美術館やカナ
ダのバンクーバーで公演を行
なった。あれから一年半――。

夕方四時、窓から陽射しの降
り注ぐ明るいギヤラリーで、パ
フォーマンスは始まった。観客
はスタップも含めて二〇名ほ
ど。

タリーは電動車椅子でギヤラ

リーを走り回ったあと、内ポ
ケットから紙を取り出し、一
枚ずつ読み上げ、床に落とし
ていく。半透明の小さなト
レーシング・ペーパーに書か
れたつぶやきは、タリーの今
の気持ち【図版1・2】。

「介護度が高くて一日平
均3時間ぐらゐのサービス提
供が限度なので／全てが分刻
みでセットされる／穏やかな
生活を期待することは困難だ
／スケジュールありきの生活
／「当たり前だろう」と声が
聞こえる」

「介護保険制度は「家族」
が同居していることを前提に
定められている制度だ」

「炎天下、普天間基地の周
りを歩いた」

「姜徳景さんや金順徳さんた
ち日本軍「慰安婦」の絵画を見
た時の衝撃は／そこに真実を見
たからだ」

「3・11が巡ってきたが、放

図版1 イトー・タリー 《37兆個が眠りに
就くまえにV o l . 2 「自分で額を撫でると
き」》 パフォーマンス、2021年4月
11日、工房・親 撮影・写真は全て筆者



射能が飛散した川俣町山木屋を
丸2年訪ねていない／目をつむ
るとその風景が広がる」

「どうやら人工呼吸器を導入
するかが／分岐点になるようだ
／生と死の分岐点」

「京都の林さんが死を選んだ

図版2 紙片を読むイトー・タリー



図版3 床の上で



ことをどうしても否定することはできない」

「沖繩を訪ねる度に宜野湾市にある佐喜真美術館で「沖繩戦の図」の前に佇む／なぜまた来たのか自問する」

「頭は最後までではつきりしているのに／意思の疎通の方法を失ってしまったら、／どんな世界が待っているのだ

ろうか」

「お腹に力が入らない」

三十枚のトレーシング・ペーパーには、介護を受ける現在の生活、家族を前提にする介護制度、日本軍「慰安婦」、沖繩、福島など、イトー・タリーの日常とこれまで取り組んできた、そしてこれからも組み続けたい大切な経験と思想が凝縮されている。パフォーマンスの後半、タリーはスタッフの助けを借りて床に仰向けに寝転んだ。そしてゆっくりと右手を思いっきり上に伸ばす【図版3・4】、緊張に満ちた動きを観客たちは見つめた。さらに上半身を起こしたタリーの周囲を、薄く剥がした雲母で囲んでいく。黒くきらめく雲母の点線は、タリーのからだと存在の軌跡だ。

パフォーマンスから1週間後、私はタリーにZoomで話をうかがった。

② 介護保険から重度訪問介護に

タリー…去年の十二月二三日から、重度訪問介護について、夜の介護者が入って。夜ひとりである不安が募ってきて、そこから介護体制が変わったんですね。十二月二三日以前は、ひとりだけで寝て、介護保険だ

図版4 マットから移動



けだったし、そうすると非常に限られちゃいますよね。一日に一時間の掃除が週に三回、買物が一回。あとは、バラバラとした介護のサービスを受けてただけで、やっぱり、体調の不安が増えてきて。トイレに一人で行くのが大変になってきたんですね。要介護3の介護保険だけでは、全くひとが来てもらえないので、ほんとに困っちゃうわけ。朝はヘルパーさんがいた

けど、お昼前にトイレに行きたくてもいけないとか。午後も、ひとりでがんばって、トイレ行ってただけど、それがかなわなくなつて。もう介護保険だけでは生活が成り立たない。介護保険の方は、家族がいるっていうことが前提なので無理が来て、重度訪問介護に。(水を飲む)
北原…介護保険が家族を前提にした問題のある制度だというのは、パフォーマンスで話されて

いましたね。

タリー…それと、血栓ができて。お正月、脚がパンパンになつて。大変なことになるなくてすんだんだけど。血栓が心臓に行ったりしたら、大変。…今、だめかもしれない(からだ)と相談)。

北原…今、そばに誰かおられますか？ じゃあ、ストップしましょうか、ここで。(間)自分のからだ動かせる部分を動かして、想像していたより、はるかに元気そうだ

なというのが、印象だったんです。病気とか介護とかが、展覧会の全体のテーマになつているけど、読まれた文章のなかでは、それだけでなく、姜徳景さんや沖繩の話とか、これまでタリーさんが取り組んでこられたテーマがきつちりと入っているな、と。介護の話を広がりをもって語っている。

(3) むいてもむいても、剥がしても剥がしても

北原…手法的にも、雲母をはがすのも面白かった。なぜ、剥がすのか？ 姜徳景さんの追悼パフォーマンスで玉ねぎを使った時も、むいてもむいても何も残らない。それは本質とか核心とかはなくて、表象やどう見るのか、が問題だという表現の方法に繋がっているのでしょうか。ずっと昔、仮面をかぶってパフォーマンスをされていた時期があつたじゃないですか。あの時はタリーさんに、仮面とい

うのは偽りの自分で、剥がしたら本当の自分があるのか、と尋ねたことがあるんですが。それからずいぶん発想の仕方が変わってきたのでしょうか。

タリー…そうでしょうね。いつも仮面をかぶっている。いくつもの仮面をかぶっているという。

北原…ああ、繋がっているわけですね。

タリー…そう。ゴムにしても玉ねぎはもちろんそう。根本的に最初の発想は、レスビアンとして、カミングアウトしても変わらないし。現状はなかなか変わらない。いつもなかなか表には出してもらえないっていうか。どこかニヒリズム的な感覚があつたと思うんですけど。

だけど、だんだん、順徳さんのこととか、沖繩のこととか見ていく中で、自分のことではないけど、彼女たちの無念さをひとごとでないとと思うようになりました。

「玉ねぎの皮を剥くように、あなたは自分の殻を破っていきたいのね」って言ったのは、順徳さんでしたからね。

北原…ああ、あのときは私も一緒に韓国に行つて、パフォーマンスを見ましたものね。

タリー…そうそう。今回は雲母もともと鉛を使ったこともあるし。カナダではそんなの持つてくるなって叱られたけど。金属とか鉱物とか、惹かれるところがあつて。雲母って剥がしてける、固いのね。そこに変化していくことがあるかもしれない。わりとポジティブな感じで、剥がしていくっていう。

やつぱりALSという病気になつてみると、自分と向き合うことが増えたと思うんですね。あなたどうする気なのか、つて自分で決めなきゃならないから。死を選ぶのかどうするのか。雲母は、バラバラになつて、結晶になつて、ほんとに細かく絵具に溶かして使うくらいのも

のになるわけだから。粉とかね。あんまり言いたくないけど、骨とかね、そういうこと繋がる。そこは強調したくないけど。また、そうやって溶けていくような感じ。それは雲母であつて、やつぱり現実の世界で身を置いて感じていることは、感じたまま伝えたいって。それは、今までの態度と変わんないです

北原…しんどくないですか？
タリー…大丈夫。トーン下げたから。

(4) ほんっと、時間がなくて。またやりたい
北原…準備はいつ頃からされたんですか？
タリー…もう何やっていいかわからなくて、今年に入つてから、二月。本格的には三月の頭くらいからかな。日常が新しいことだらけで。新しいヘルパーさんが来て、夜は泊つてるし、そういう生活の変化に、追つついて

いなくて。介護のことや医療のことばかりで、パフォーマンスのこと、考えられなかった。

でも、あと、ないじゃないですか、四月一日まで。お尻に火がついて、必死で考えました。考えるって、ほんとは、楽しいことなんだけど。でも、時間がなくて辛かつたですね。一日に平均五名の人がかかるので時間がないですよ、ほんっとに。でもね、やつぱり、本番でやんなくちゃいけないと思うから、三〇枚書こうと思つたし。

北原…すぐきれいでした。パフォーマンスのあと、雲母の上トレイシング・ペーパーの文章を置いたら、透けて見えて。書く中で考えたことは？

タリー…今、起きてることを書きたいと。ほんとは、今まで関わったところに行きたいけど、行けないし。それを自分で留めおきたいっていう思いがあつて。色んな問題が解決してるわけじゃないけど。残念ですけど

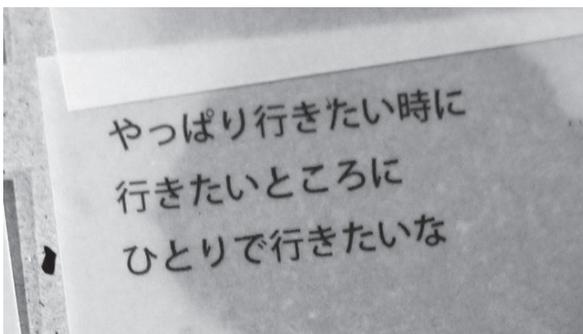
ね、行けないし。思いだけでも留めてないと。せひ、入れたかったの。慰安婦のことで、沖縄と。ずっとテーマにしてやって来たから。私の中で忘れたくない終わらせたくないし。

北原…パフォーマンスをやつてみて、どんなお気持ちですか？
タリー…終わった直後は、またやりたい、って思つた。今でも、まだやるうと思えばやるんだなつて、思つたのは確か。間があくと、不安になつてくるんですね。カナダから一年半経つて、私出来るのになつて、不安があつた。

北原…今回、一時間の長いパフォーマンスだったんですね。最初からあの長さでやるつもりだったんですか？

タリー…どうなるか、わかんないって思つてましたね。会場で咳込んだり。あのね、始まる前に、トイレに行つて。恵比寿の教育関係の施設がそばにあつて、ね、そこでコンセントを借りて、

図版5 トレーシング・ペーパーに書かれた文章(一部)



痰を出したんです。出せたの。痰を出すですつきりするんですよ。
だから、安心して始められた。痰を取ることに、「サポートしてくれる」大野さんが慣れてきたから、それで、やれたと思う。

だから最後まで読めた。読めないかもしれないと思ってたし。「パフォーマンスの後半で床に」寝るけど、どうやって動くかなんて、全く考えてなかった。手がどのくらい動くかも、あんまりわからない。

北原…紙を取り出すときも、どれだけからだ動くのかが見ている人に直接伝わってきました。動く二本の指であらゆることをされていて。今回は、日中の会場で明るくて、狭いギャラリを車椅子で走り回っているっていうのが、強烈だったんです。

同じことを都現美でやってもまた違っただろうし。タリー…ハナから映像はやる気がなかったよ。なんか…あ、ちよつとやめよう。北原…わかりました。ありがとう。じゃあ、ここまでにして。切りましょう。大事にしてください。

* * *

インタビューは途中で何度も中断したが、タリーは自分のからだだと相談しながら話を聞かせてくれた。会話は途中で終わったが、その後大事がなかったと聞き、ほっとする。

「わたしの身体の状況は、下肢は全廃、上肢は体から30cm範囲しか伸ばすことができず、キーボードは一本指で打ち、体幹も、腰を左右に移動することが出来ないという状況」――これは、半年前、ラプビースクラブのウェブサイトの連載に書いていた自身の体調である(「わたしの言葉を。Vol. 2」0916)。

タリーは重度訪問介護の仕事の経験もある。だが、障害が始めるとわからないことばかり。「身体障がいのある人と周りの人の集まり in 小金井」を作って、同じ障害者と繋がるうとした。外に出かけたいのに制

度が対応していないことを知ると、周囲に呼びかけ小金市の議会に陳情した。陳情書はいつも生活をサポートする友人の大野玲が、介護者としての経験を語り、タリーの言葉を代読した。その甲斐あって移動支援を獲得した。自分でおかしいと思ったことには声を挙げ、周囲を動かして行動する。それはタリーのパフォーマンスにも生き方にもずっと一貫してきたことだ。

今回も新しい表現を切り拓くタリー。パフォーマンスでのタリーの言葉が今も次々と蘇り、私につき刺さる【図版5】。「やっぱり行きたいときに／行きたいところに／ひとりで行きたいな」

「きたはらめぐみ・戦時下の視覚文化と社会について」研究中。主な著作に『アート・アクティヴィズム』(攪乱分子@境界)にもインパクト出版会、編著に『アジアの女性身体はいかに描かれたか』(青弓社)など。】